
さあ月を上げ、そして見惚れよ

やー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ月を上げ、そして見惚れよ

【コード】

N0188Q

【作者名】

やー

【あらすじ】

好きにしる(仮)シリーズ第四弾。

あらすじ。

瑞穂、誘拐されるの巻。

(前書き)

旧称月宮美月、現在は橋美月。既婚者、と言うよりは一児の母。
臯の実姉。左下は普段着、右上は月宮家決戦用服。性格を一言で言
えば、豪胆。姐御と言つ単語がよく似合う御仁である。時折フラフ
ラ街を出歩くことも。三度の飯より戦いがすき。

真夜中に、水の音と共に竹が岩に打つ音が響く。

部屋を見渡せば、やたらと月を絵を描いた襖や壁が目立つ。

一言で今居るこの部屋を表せば、高級旅館の中に居るような感じだ。

そして、私事は氷結瑞穂の目の前に座って酒を飲んでいるのはさつき行き成り顔を合わせたと同時に人の首根っこ掴み取ってこの旅館に引つ張り込んだ張本人である。

私の記憶が正しければまだ名前を名乗ってはいない。「ああ、忘れてた。私の名前は橘美月だ」今名乗った。っておい。

「何だお前、突っ込みたそうな顔をして。一先ず一杯飲め。成人はしているんだらう?」

「してるけど、酒は好きじゃない」

「私の酒が飲めん、とでも?」

「うん」

「むむう、飲酒の経験は?」

「あるよ。好きじゃないだけ」

「ふむ、なら何時か慣れる。何事も経験だぞ、氷姫」

……あれ、この人今なんて言った? ひょう、き? 確か、世間で言う私の通り名?

「黒い髪に黒い瞳、そしてその特徴的な動物の耳の様に跳ねた前髪。そなたの風貌は見聞きした特長全てに当てはまると思うのだが、

違ったか?」

「……確かに、漆黒の氷姫とか蒼月の氷姫とか氷結の黒姫とかどこぞの子共がよむような漫画に出て来る様な通り名があったけど。

でも面と向かって言われるのは初めてだよ」

「ん、魔導師にとって姫と言うのは元来若くして賢者の称号を与えられし女性に送られる称号だ。

剣士と対となる存在である魔導師……その中でも姫と称される人物とこうして月を肴に共に酒をのむ。

中々に面白いとは思わんか？」

「思わない。と言うか之誘拐か拉致」

「む、誘拐拉致とは人聞きが悪い。面白そうな人物を見つけて酒を奢る為に旅館に連れ込んだだけだぞ」

「人はそれを誘拐と呼ぶような気がするよ」

「むう、言わなかった事に腹を立てているのか？」

橘美月とか言うの女は、そんな事を言いながら猪口にまた酒を注ぐ。

後人の猪口に新しいのを注ごうとしないで欲しいんだけど。

「人の意見を仰がないところに怒っているね」

「何、些細な事さ」

「些細じゃない。と言うか帰っていい？」

そろそろ怒っていいかな私。

「まあそつ急ぐ事も無いだろうにゆっくりして行け」

「やだ。と言うかその上これ監禁」

「ふむ、まあ気にするな」

「するよ」

「細かい事を一々きにする奴だな」

「お前が気にしろよ」

えーとか言う顔されても殴るしかない私は色々困る。

ああ、じゃあ殴って良いのかな。

「一先ずその握り拳は引つ込めて一緒に飲もうじゃないか」

「握り拳を作らせたのは誰だと思っっているの？」

「何、気にする事は無いさ。そうだ、なんならつまみでも頼むか？」

とか言うっぽいと近くにあったメニューを投げ寄越す。

……まあ、軽い夜食くらいは良いか。私は取りあえずメニューを

……ねえ、このメニュー、やたらと表示料金がおかしい。

一番安い数字が三千百 e n の刺身セットで一番高いのが……六万、十万……まだ上がる……うん、最大十二万 e n。十二万 e n が最大だね、うん。VIP 会員限定だそうだけど値段がおかしい。

「何でも頼んで良いぞ。此処の料理長に話しは付けてあるからな。」

全額私持ちになっているが、まあ実際払うのは実家だ。気にせず飲み食いすると良い」

「……良家のお嬢様？」

「いや、一昔前まで栄えていた武人の家系だ。今では傍系の者達が色々な事業に手を出していてな。」

此処も言わば遠縁の家だ。だから気にする必要はない」

「……行き成り連れ込んだ人間をただで料理を振るうことに関してなんか言われた？」

「いや？ 私の友人だと言って連れて来たら喜んで料理を振舞うと言っていたが」

「誰が友人だ、誰が」

「お前」

「断る」

「そう言うな。煮物なんか如何だ？ この焼酎によく合うぞ」

「要らない。と言うか人の話を聞けよ」

「ん？ 何か言ったのか？」

「酒は、飲まない」

「飲んどけ飲んどけ。飲める様になって損はないぞ」

……確かに一理はある。酔った体験も無いし。

でも酔いたいとも思わない。ふうむ……一番安いお酒が4080 e n ってさ、値段だけで飲む気が既に失せるのは一般人の感覚だからかな？

「どうした？ 遠慮する必要は無い。静かな新年会の気分で頼むといい」

「うん、新年会と言うには流石に高過ぎない？」

「そうかい？ 新年会は各国のお偉いさんが良く来るんだが」
「めっちゃ場違い？」
「気にするな、そもそも私自身嫁いだ身だぞ」
「言いながら飲む手は止めない。どっちかにしろと言うべきかな」
「良いの？ 色々」と
「気にするな。そう言うのとは特に関係は無い」
「ああそかい」
「何だ、さつきからやけに機嫌が悪そうだな」
「機嫌が良くなる要素があればね」
「ふむ、おかしいな」
「何処に良くなる要素があると言うんだよッ！」
「まあそう騒ぐな。一先ず酒でも飲んで落ち着け」
「言いながらまた飲酒を勧める。いい加減鬱陶しいし、まあ飲むか」
「私は猪口を口に付け、ぐいっと中身を飲み干した……うげえ」
「む、飲みっぷりは良いが慣れてないようだな」
「……好きになれそうに無い」
「つまみも一緒に如何だ？ 少しは良くなるぞ」
「焼酎に合う物って？」
「まあ色々だ。今もって来させる」
「言つと橘とか言う女は手を叩いて適当に何かを言った。
すると「はい、ただいま」と微かに響いただけで誰かが入ってく
ると言う事は無かった。」
「……これだけ料理があるのに、まだ頼むの？」
「酒の肴など、適当に口にしていると直ぐに消えるからな」
「それはあんたが大食いなだけだよ」
「また何か言いたそうだな。意外と控えめなんだな」
「そ」
「まあいい。新年の祝いも重ねて共に飲もうではないか。
夜は訪れたばかり。ゆるりとするのも悪くは無い。違うか？」
「その意見には同意しよう。問題はいきなり引っ張られて来た私の

気持ちだね」

「じゃあ仲直りの酒でも飲もうではないか」

とか言いながら人の意思を無視してまた空の猪口に酒を注ぐ。

うん、まずは人の意思を尊重する事から始めようか。

「また何か不満そうだな」

「……別に」

「機嫌が悪いなら、食事でも取って忘れるのが一番だ。なあ、漆黑の」

「いきなり脈絡も無い名前を付けられたーしかもさつきと呼び方違うしー」

「細かい事を一々覚えているやつだなあ。些細な事くらい忘れるよ」

「いや、忘れると言う事は私には出来ない」

「ふうん、難儀だなあ」

言つとぐいっと酒を飲み干す。

「何なら、お前も好きに呼ぶといい」

「人には名乗っておいて？」

「名などこの際意味は無いだろう。現にお前は名乗ろうとせぬではないか」

……確かに一理ある。でも、名乗る気は起きない。

「な？ 私にとって名など些細な事さ。

好きに呼べば良いさ。

それこそみっちゃんでもみっちーでもみつつんでもみつきんでも好きに、な」

おかしい、妹の呼び名が混ざっている。

「漆黑の、どうかしたか？」

「いや、別に」

「そうか……」

そして夜は更ける。

月を掲げる魔導師と、月を砕く剣士の飲み会もどきは続く。

(後書き)

「気まぐれに書いた代物ーんじゃ次回。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188q/>

さあ月を仰げ、そして見惚れよ

2011年8月27日03時37分発行